

史料にみる **歴史**

## 浮世絵とゴッホ

左：歌川広重  
「大はしあたけの夕立」  
右：ゴッホ「雨の大橋」

江戸時代の浮世絵師歌川(安藤)広重(1797~1858)は「東海道五拾三次之内」や「木曾街道六拾九次」などの名所絵を残したことで知られているが、最晩年の風景版画「名所江戸百景」は遠く離れたヨーロッパ画壇にも大きな影響を与えていた。

この「名所江戸百景」は安政3(1856)年から同5年にかけて出版されており、総数は2代広重の「赤坂桐畑雨中夕けい」の1枚を加え119枚である。

「広重ブルー」などと評される藍を生かした着色法で、雪・雨・霧などの天候現象をうまく風景の

中に生かし、豊かな抒情性を表現しているところに特徴がある。

119枚のうち、ここにあげた「大はしあたけの夕立」のほか、「亀戸天神境内」「王子装束糸の木大晦日の狐火」「深川洲崎十萬坪」「日本橋雪晴」「隅田川水神の森真崎」「よし原日本堤」などが佳作とされ、今日、全作品は『浮世絵大系』16・17巻(集英社)に収められている。

「名所江戸百景」は、広重自身の江戸名所絵の集大成というだけでなく、その後の風景画に一つの方向性を与えたものとして高く評価されており、たとえばオランダの画家ゴッホ(1853~90)は広重の「大はしあたけの夕立」を模写し、「雨の大橋」という作品に仕上げており、「亀戸天神境内」の図も同じように模写していた。

こうしたことはゴッホだけでなく、フランス印象派の代表的な画家モネ(1840~1926)にもみられ、

また、ロンドンとパリを中心に活躍したアメリカ人画家ホイッスラー(1834~1903)にもみられる。ホイッスラーは、日本の画家が使う落款をまねて蝶のサインを使っているほどである。彼には、浮世絵の意匠を借用した「肌色と緑のバリエーション：バルコニー」という作品もある。

鎖国のときには、浮世絵などはシーボルトらオランダ商館関係者によってヨーロッパにもたらされるだけであったが、幕末に開国して以来、広重の「名所江戸百景」に限らず浮世絵の名品が海外に紹介され、ジャポニズムとよばれる現象をひきおこしている。

なかには単なる日本の浮世絵の模倣もあるが、そこから創意あふれる画風も生まれており、わが国の化政文化が思わぬところで大きな影響を残していたことがわかる。

(静岡大学教授 小和田哲男)